

◀JICA だより▶

## 大学生の視点にふれて

荊 木 絵美子

昨年4月にJICAに入団して早1年が過ぎた。社会人の一年生であるのと同時に、JICAの一年生でもあり、見るもの聞くもの全てが新鮮で刺激的な一年であった。未だ社会の常識というものも身につけておらず、職場内外の方々にご迷惑ばかりおかけしている。良くも悪くも慣れることだけは早いので、私もいつの間にか、JICAという組織の一員としての考え方が身につきはじめている。組織人としてふるまわなければならないのは当然であるが、自分自身の考え方を形成しつつ組織人としての考え方を身につけてゆくのは、始めは難しいように思う。外部からの批判に対して自分がどのような態度をとるかはその人の組織人度(?)を示すことにもなりうる。そのようなことを実感させられる機会が、先頃あったのでご紹介したいと思う。

それは農学部系学生の自主的なゼミ活動の交流会であった。農業、林業分野からいくつかのテーマを決めて関係者を招き、学生と質疑応答を行うというプログラムである。そのうちのひとつとして開発途上国への林業協力が選ばれ、我々に参加依頼があった。適任者は他にもいたのだが予定が合わず、新人の私が行くことになった。学生は、JICAの事業や林業協力の現場の話が聞きたいということだったので、林業プロジェクトの専門家として現場経験を持つ方に同行していただいた。

当日、各テーマ毎に興味のある学生が集まり「JICAの林業協力」のところには15人程が参加した。大学内の和室に車座になって座り、ざっくばらんな雰囲気ではじめられた。集まったのは、南北問題、NGO活動や自然保護問題等に興味のある勉強熱心な学生であった。フィリピンで「上総掘り」という井戸掘りのボランティアを経験した人もいた。私はとりあえず、JICAの事業内容は意外と知られていないので、JICAの各事業や林業協力について概要を説明することにした。自分の机上の仕事の範囲ならどうにか説明できても、林業協力全体ましてやJICA全体、となると自分の無知を思い知るだけである。学生からの質問はかなり活発に出たが、やはりよくマスコミの関連記事や関連書を読んでいるようで、質問というよりはODAやJICAへの批判であり、中には詰問といえるものも多かった。その内容を一部紹介する。

「JICAは貧困層への援助をしていないがどのように考えているのか」、「道路やダム建設で自然を破壊した上、農民を追い出し都市のスラム化を助長していることについてどう考えているのか」、「JICAは森林を伐採し、その利益は企業のためになっ

---

IBARAKI, Emiko: "What I thought during the meeting with students"

国際協力事業団林業水産開発協力部

ている」等々、かなりマスコミの論調に影響されているのではないかと思えるものも多かった。しかしまた、次のように JICA がより良い援助協力を行うため努力を惜しまないよう励ます意見もあった。

「JICA や国際協力に対するマスコミの書き方は非常に非協力的である。より良い援助活動を本当に望むならば、マスコミは批判ばかりするのではなく、正しい事実を知らせてどうすべきかを読者に提示すべきではないか。また、何故 JICA はそのようにマスコミに要請しないのか」、「マスコミは、プロジェクトを形成する段階で企業やコンサルタントの作成した案を丸のみせずに、チェック機能を強化する努力をしてほしい」等である。

多少認識が違っていると思われる意見も多かったが、中には的を得ているものもある。いずれにしても、私の答えられる範囲のものは少なく、明らかに誤解であると思われることについて説明を試みたくらいである。国際協力というものは、これは林業協力一つをとっても抱えている問題は複雑で難しい。日本国内でも造林や伐採といった林業の経済的活動の部分と森林保護といった公益部分の両立の問題は、両サイドの対立化となって解決されにくい。ましてやこれが、経済、社会上で様々な難問を抱える開発途上国での土地利用の問題になってくると、環境造林か産業造林かという選択もあるが、木材（森林造成）か食糧（農地、牧草地化）かという選択は非常に難しいと思う。学生達の意見は、更にインフラ整備や工業化と農業、林業の対立の話まで含まれていたわけだから、答えることが非常に難しいレベルといえる。ただ残念であったのは、環境問題については世論でも相当大きく取り上げられていながら、密接な関わりのある林業についてはあまり理解がなされていないことである。

この交流会に参加したことは、私にとって自分が所属する組織への批判をぶつけられるという経験であったばかりでなく、マスコミの立場や林業協力について改めて考えさせられる良い機会であった。自分が批判されると弁護したくなるのと同様に、やはりマスコミが批判されると何か弁護できるところはないかと思ってしまう。例えば、日本の援助は相手国要請ベースだから、開発途上国では日本人の思っているようにはうまくいかないものだから、外交上の問題だから…等々言い訳はあるのだが、自分で口にするると実に情けないものである。そのような前提条件の元で、批判はそのまま受け取め、その上で JICA が出来ることや自分に出来ることの中で改善していくべき点について話すべきなのだろう。私も一年間のうちにすっかり国際協力の難しさや日常の慌しさの中で、足元から少しでも良い協力をしていくという態度を失いかけていたことに気づく。

今後また、JICA 事業や林業協力の現状や方針について説明しなければならない機会がたくさんあるに違いない。どのような協力をするのが相手国のためになるのか、自分自身も模索中のところであるが、JICA もまた組織としては発展途上である面が多い。現在、協力方針、方法等については運営審議会や国別研究、中長期展望の作成等で検討されている。協力の体系、プロジェクトの運営方法、事務処理方法にいたるまで、改善点は山のようにあり、それだけ流動的な部分も多いと思われる。このよう

な体制の中で、林業プロジェクト一つをとってみても、JICA 本部・在外事務所、現地プロジェクトサイト、関係各機関、国内支援委員会等において多くの方々が関わり、より良い林業協力を目指して日々努力を重ねている。このような努力が確実に実を結ぶよう、また学生をはじめ多くの一般の人々に認識を深めてもらい世論の協力を得られるよう JICA は頑張らなければならない。私自身については、幸いながら専門家の方々にお会いする機会に恵まれているため、様々な意見をよく聴いてまずは勉強させていただくことが必要と思っている。

---

## 新刊紹介

◎作業法 (MATTHEWS, J.D.: Silvicultural Systems. Clarendon Press·Oxford, 284 pp., 1989, ¥ 10,560 税込)

著者は Aberdeen 大学名誉教授で、かつて IUFRO の Section Leader として活躍された造林学の権威である。

本書の第 I 部では、“作業法の理論的背景”として、森林生態学と遺伝学・施業林の保護的機能・森林の被害防除及び造林学と森林経理学の関係、を解説し、第 II 部では“各種作業法”について一般的な記述・得失及び実践への適用、が主として述べられている。

このなかから、熱帯林に特に関係のあるものを摘録すると：

第 I 部では、熱帯多雨林における野生動植物天然集団の保全・機械的（伐木集材）被害及び木材市場が造林に及ぼす影響について特に解説している。

第 II 部では、傘伐作業 (Shelterwood systems) の章で天然更新を果す機能について解説し、熱帯傘伐作業の章では、マライ均等作業 (The Malayan uniform system)・Uganda と India への適用及び熱帯多雨林の間伐が、また変換 (Conversion) の章では保育伐採・混交林への適用及びエンリッチメント (Enrichment) が解説されている。

ちなみに、Enrichment は「劣悪林において主要樹種の割合を高める各種の手段を含み、熱帯林でのそれは、一般に天然または開発結果による lines, strips, まれに gaps に、まき付けや植付けによって行われる。」と定義している。この Enrichment に合意された邦訳は未だないが、筆者は上記の定義から「有用樹種の更新補整」としておく。

本書は、総括して作業法に関する最新の基礎的・実践的情報を知ることのできる、きわめて価値ある出版である。

(坂口勝美)